



Title	志賀直哉「児を盗む話」論：父親の＜言葉＞をめぐって
Author(s)	黄，如萍
Citation	阪大近代文学研究. 2005, 3, p. 28-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92630
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

志賀直哉「児を盗む話」論

—父親の〈言葉〉をめぐって—

黄 如萍

はじめに

「児を盗む話」は、一九一四年四月『白樺』に発表され、その後、一九一七年六月新潮社刊『新進作家叢書』の一冊『大津順吉』に収められた際、初出『白樺』の冒頭部と、末尾の部分が削除、改訂された。

まず梗概を確認しておこう。一篇は「私」が回想する形で語られる。父親に罵倒されたことをきつかけに家を出た「私」は、「瀬戸内海に沿うた或小さい市」を訪れる。一人暮らしをしているうちに「私」は心身に疲労を感じるようになり、疲れを解消するために、按摩のところに通うことにするが、そこで按摩の「色の黒い可愛い」女の「児」に出会う。その後「私」は、芝居小屋で別の美しい女の「児」を見かけ、その「児」を「盗む」空想をし始める。結局彼は按摩の女の「児」を「盗」み、巡査につかまってしまうという内容である。

この「児を盗む話」は志賀の初期作品の掉尾に位置するに

もかわらず、研究史で数多く論じられてきてはいない。また、その数少ない研究においては、志賀の後年の自作解説「続創作余談」①を参考にしながら、本文で語られる「私」の心境を、志賀の実体験に基づいて読む傾向が強い。例えば市川浩昭②は志賀と父親との問題にふれ「主人公の思いには志賀自身の問題が見えかくれしている」、「作者の実生活」が「創作の基盤に置」かれていと捉えている。また須藤松雄③は、「児を盗む話」を、志賀の「尾道生活当時の空想を材料」として、自我貫徹の方式の敗北の姿を描いた「作品と見ている」。

このような作家の後年の記述や体験談から得た見解を作品に当てはめていく方法は、志賀作品の研究にはよく見られるものである。確かに「児を盗む話」には、志賀の尾道の体験や、実際の父親との不和なくしては書き得なかったであろう、と見られる記述も少なからず確認できる。しかし、「続創作余談」にしたがって作品を読み解くことは、作品が内包する

様々な読みの可能性を開きしめようことになろう⁽¹⁾。

そこで本論では、志賀の後年の「続創作余談」とはいったん距離を置き、作品そのものを細部にわたって分析することを優先する。特に、「私」が「児」を「盗む」行為に至る経緯と内面の動きを中心に論じていく。そして、父親の罵声の「言葉」が果たす機能など、一篇を捉え直す新たな視点を獲得することを目的とする⁽²⁾。

一、父親の「言葉」の力

本作は、「其頃」、「其晩」などあるように、「私」が「児」を「盗む」行為に至る経緯を回想する形で構成されている。

小説の冒頭には、その小説を読む鍵がふんだんに仕掛けられているものであるが、「児を盗む話」も決して例外ではない。「児」を「盗む」経緯は、冒頭の父親の罵声から語り始められ、今まで「三週間以上東京を離れた事がなかった」「私」が、父親と喧嘩をし家を出たことが物語の発端となっている。それほど父親の罵声は大きな意味を持っていると考えられるにも関わらず、それ以降の「私」の回想の中で「私」が父親の存在や父親に対する心情に全く触れていないのは不自然と思われる。このように後年回想する際、敢えて父親について語らなかつた点こそ問題にすべきなのではなからうか。まず、父親の罵声に着目し、父親と「子」としての「私」の関係を

検討する。

或朝父が、／「貴様は一体どんな事をしてゐて将来どうするつもりだ」（傍点は原文のまま、傍線は論者。以下同じ）と蔑むように云つた。／「貴様のやうなヤクザな奴が此家に生れたのは何の罰かと思ふ」こんな事を云つた。／尚父は私の顔を見るさへ不愉快だとか、私が自家にゐる為に小さい同胞の教育にも差し支へると云つた。父は私が現代の弊害を一人で集めてる人間のやうに云つて、だから、私（或ひは私達）が社会から擯斥されるのは当り前だと真正面から平手で顔をビシヤリ／＼撲るやうな調子で云つた。

波線部のように、実際に父親が激怒した「そんな事」とは具体的にどのようなことを指しているのか明らかにされず、（空白）のままで語られている。これと類似した父親の罵声が綴られた志賀の他作品には「清兵衛と瓢箪」（一九一三年一月一日『読売新聞』）「或る男、其姉の死」（一九二〇年一月六日／三月二十八日『大阪毎日新聞』夕刊）⁽³⁾がある。「清兵衛と瓢箪」では、清兵衛が父親に「将来迎も見込のない奴」、「もう貴様のやうな奴は出て行け」と言われており、「或る男、其姉の死」の兄は、「全体貴様は小説なぞを書いて居て将来どうする心算だ」と言われている。

これらの「将来」という言葉からそれぞれの父親が認識する（あり方）と実際の（子）の（あり方）との相違を知ること

とができる。「清兵衛と瓢箪」では、父親は瓢箪に夢中になつてゐる清兵衛の〈あり方〉に激怒し、「或る男、其姉の死」では、父親は兄の小説を書くという〈あり方〉に反対してゐる。これらの作品とは異なり、「児を盗む話」では、父親が激怒する理由が明確に語られていない。後に言及するが、作中に「原稿紙」といった小道具や、繰り返し〈書く〉ことについて「私」が言及してゐる箇所が見られることから「私」の職業は作家だと考えることができる。しかし、敢えて父親の言う「そんな事」を小説を〈書く〉こととして明示してゐないのは何故なのか。以下、この点が一篇の主題を捉えるうえで非常に重要な問題であることを明らかにしていきたい。

先に引用した箇所の傍線部から、父親が「私」の〈あり方〉に対し、首肯しがたいという強烈な感情を抱いてゐることが読み取れる。「同胞の教育」、「現代」、「社会」という言葉から、「私」が家、時代、社会、といった、人間としての総ての範疇において、〈役立たず〉の存在なのだということが、父親の激怒の主たる原因だと考えられる。ここで注目したいのは、父親の罵声を裏返して考えれば、父親が望んでゐる「私」の〈あり方〉が、家、時代、社会のうちのどれかの〈役に立つ〉ことだと読み取れることだ。父親の罵声はそうした期待がこめられた〈言葉〉と捉えることができる。そして「私」の家出は正に父親の考えと「私」の〈あり方〉とが相違してゐるための抵抗・反逆だと言ひ得るのである。

以上、述べてきたように、「私」の家出は父親の罵声が主な原因である。では、何故父親の罵声はこの後触れられてゐないのか。「私」の語り方に注目し、父親と自身の関連に全く触れない「私」の回想の意図を明らかにしていきたい。

自身の一人暮らしの状況を語る「私」の語りの特徴として、仕事への言及を繰返し強調してゐることが挙げられる。「仕事は殆ど半分まで行つた」、「仕事は益々多なる」、「仕事を中止する」など、具体的に仕事の内容はどのようなものか示されていないにもかかわらず、その進度に拘泥してゐる様子が確認できる。また、仕事に影響を及ぼす、〈高揚〉したり、〈下降〉したりする不安定な〈精神〉の状態についての言及が数多く見られる。このことにはどのような意味合いが込められてゐるのだろうか。

「瀬戸内海に沿うた或小さい市」で一人暮らしを始めた頃の「私」は、「落ちついた気分にな」り、「暫く休んでゐた長い仕事にとりかかつた」とあり、「全身で快い興奮状態に浸」り、「総てと全く差し向かひになる」という、〈高揚〉した〈精神〉の状態にあつたことが分かる。しかし、このような仕事に振る〈高揚〉した「快い興奮状態」は、長時間持続することができない。次のように半月程継続すると、〈下降〉していく。

こんな夜が半月程続くと私は段々に疲れて来た。頭が重く肩が凝つて何となく不機嫌になつて来た。(略)か

う云ふ事が毎晩のやうに続いた。私もいよくまるつて来た。(略)もう快い興奮も全くなくなつた。仕事は益々ダルになる。

「精神」が興奮し(高揚)している時は仕事もうまくいくのに対して、肉体的な疲労とともに不機嫌になり、更に「精神」が(下降)していくと、仕事に影響が出る。常に波のやうに不安定な状態が私の「精神」の傾向であり、特質であると言える。

「私」は「精神」が停滞している(下降)の状態に留まるわけにはいかない。「こんな事をしてゐては仕方がない」と自覚し、仕事を継続できない状況の打開策として、旅立つことを決意する。換言すれば、「私」は(下降)の状態にある「精神」を旅という方途で再び(高揚)させ、仕事ができる状態に戻そうと試みている。「私」にとつて、何故旅という方途が「精神」を(高揚)させる機能を持つのか。「美」なる風景への「私」の関心に着目して考えてみる。

「私」の「美」への執着は、作品中数多く見られる。例えば、京都での部屋探しという昔の「私」の体験を語る場面を見ると、京都への転居は「急に自家が厭にな」ったことが理由だったが、あいにく「きたない部屋ばかり」という理由で「急に京都が厭にな」り、「一晚」も我慢できずに「二三ヶ月京都に住むつもり」で持ってきた「大きい荷」さえ東京に持って帰ってしまう。

前述したように「精神」の「快い興奮状態」が(高揚)であり、「不愉快」が(下降)ということである。「私」は、「美」の条件を満たさない「きたない部屋」によつて、「厭」という不快を感じる。つまり「精神」が(下降)している状態になり、京都での部屋探しを中止してしまうのである。

また、一人暮らしを始め、部屋を修繕した当初、「傷だらけな壁には美しい更紗の布を買つて来て下げ」、そして「隠しきれない所」は「縹子を打ち抜いた木の葉をピンで留め」たりする箇所からは、「私」の外観の「美」に対するこだわりが窺える。

従つて瀬戸内海での一人暮らしでは、「美」への追求を通して「精神」を(高揚)させていく様子が見てとれる。このやうに考えてみると、旅という方法を選択したのは、繰返し「景色はいい所」、「いい景色」の言葉からも分かるやうに、いつも眺望している四国の良い景色Ⅱ「美」なる景色への関心が大きな理由の一つだと捉えることができるのである。この「美」への追求は後の「美しい」女の「児」を「盗む」行為にも繋がる。(ただし、この「美」については、「美しい更紗の布」の「美」や、旅を通してみた風景の「美」や「美しい」女の「児」の「美」など、「私」はそれらの「美」を同列に認識している点に注意しておきたい。)

「私」は「美」なる風景への関心のために旅を思いたつたが、不安定な「精神」の状態のため、予想に反する結果にな

つてしまふ。

・最初に金毘羅へ行つた。其処の宝物は私を楽しませた。

然し本社から更に奥の院へ行く山路の何百年と経つた大きな樹の、その肌が私の弱りきつた神経を劫かした。

(略) / 翌日私は高松に行つた。私の心は少しも樂しまない。

・塩を煮る湯気が小屋の屋根から太い棒を立てたやうに穏かな空へ白く立ち昇つてゐる。(略) 私の心も流石に慰められた。 / 然し宿屋へつくと私の気は沈んで来た。

(略) 然し景色はいい所だつた。(略) 私はいい景色だと思つたが、それを楽しく感ずる事は出来なかつた。

(略) 私は翌日は朝の津で仙酔島の月見をするつもりだつたが、厭になつて直ぐ歸つて来た。旅は結局何にもならなかつた。

「楽しませた」と「慰められた」とあつた直後、「然し」という逆接の語が続けられ、「楽しませた」、「慰められた」状態を長く持続できない「私」のありやうが語られる。また、波線部で示した箇所のように、「月見をするつもり」だつたが、特に理由が語られることもなく、「厭になつて直ぐ歸」つてくる様子も見られる。決して「景色」や、「宝物」が変わつたのではなく、それらに対する「私」の捉え方が變つたのである。つまり「私」の〈精神〉のありやうによる結果だと言える。「私」の楽しむ、楽しめないという〈精神〉の〈高

揚〉と〈下降〉の起伏は、一時的なものであり、どちらの状態も長く保持できない。このように「私」の〈精神〉は常に〈高揚〉と〈下降〉の間で揺れ動いてゐるのである。

旅は「結局何にもならなかつた」とあるやうに、元々旅を通してその〈美〉なる風景に触れ、停滞する〈精神〉を打破することを期待していたが、期待通りの効果が全くないままに終つてしまつた。その後〈精神〉が〈下降〉してゐる停滞状態のまま「単調な日」を送つてゐる。

このような〈精神〉の状態で、仕事が行く筈はなかつた。「私」の仕事は〈精神〉が〈高揚〉してゐる状態ではなくしては成り立たず、仕事をするためには「私」はどうしても〈精神〉を〈高揚〉させなくてはならない。「単調な生活」に停滞する「私」は、再度〈精神〉を〈高揚〉させるために、やはり〈美〉への追求を考えた。このことが〈美〉しい「児」を「盗」もうという発想に至る重要な要因となつてゐる。

六つばかりの女の「児」に出会つた際、「私」は「美しい女の児」、「可愛いばかりでなく非常に美しい児」と語つており、女の「児」に対する好感、愛着を隠さずに表現してゐる。女の「児」は「私」が追求し続けている〈美〉の具現化として捉えられてゐることが窺われる。翌晩、女の「児」に偶然芝居小屋で再会し、元来〈下降〉の状態に停滞してゐた「私」の気分、大きな変化が訪れる。「私」は〈美〉への関心で、「盗む」という「空想」にまで拡大するが、そのことだけで、

「気分は変り、透明ない感じ」になり、〈下降〉し停滞している（精神）の状態が再び（高揚）していくのである。女の「児」の美しさは「児」を「盗む」という実際の行為をもたらず要因であり、また、仕事が捗る（高揚）した（精神）の状態に戻るための（刺激）でもある。

あいにく美しい「児」と出会えなかったため、按摩の「児」を「盗む」という結果となるが、「児」を「盗む」という「空想」の（実践）は（書く）行為に反映され、大きな（効果）をもたらしている。

「頼んで来た。——少し御用があるから、お前は其処で待つてゐるんだぞ」故意とそんな事を云つて、自分だけ机に向つた。（略）私は久しく感じられなかつた緊張を感じてゐた。私は目的もなくペンを取つて書き出した。「たうとうやつて退けた。（略）そのやりきれた自分が嬉しい。（略）」

不思議なことに「児」を「盗」んだ後、「私」は女の「児」をその場に放置し、「自分だけ机に向い、ペンを取つて書き出し」ている。ここから「私」にとって女の「児」よりも（書く）ことのほうが優先され、重要視されていること、つまり、女の「児」を「盗む」行為はあくまでも（書く）行為の推進力だと考えられる。

以上は本作における「児」を「盗む」直後までの箇所である。今まで「私」は繰返し（書く）こと仕事にこだわり続け

ているが、あくまでも仕事と自分の（精神）の状態の関連に目を向けているのみであり、何のために仕事に執着しているのかは明確に示されていない。一般論になりかねないが、仕事は生きるため、言わば一人暮らしの生計に関わるものとして捉えられることもある。が、ここでは、そのような生計に関わる切迫感はなく見られない。「私」が仕事に執拗にこだわり続ける理由は他にあるはずである。

「私」が仕事が捗る状態に戻ることに執着している理由は具体的に語られていないものの、冒頭の父親の「そんな事をしてゐて将来どうするつもりだ」という罵声と関わっていることが推測できる。従来の先行研究では、父親が激怒して発した「そんな事」を「作家」と関連付け、「私」が家出をし、作家の道に進むことに執着しているのは、父親に対する徹底的な反抗だと指摘されてきた。つまり、敢えて「そんな事」と表現されている点が軽視されがちであつたのである。もし父親に対する反発だけであるならば、前述した志賀の他の作品「清兵衛と瓢箪」、「或る男、其姉の死」のように、それぞれの父親の、〈子〉の〈あり方〉に対する不満が明らかに描かれてもいいし、また、冒頭に見られる「私」と父親の喧嘩で、「私も乱暴な事を云つた」とあるように、父親に対する反発が冒頭以外で語られてもよいはずである。したがってそれ以後「私」が仕事に拘泥するのは、全て父親に対する反発のため、というような負の感情だけでは覆い切れない要

素があると考えられる。

繰り返しになるが、「私」は回想する際、内実を明かさずに単に父親の怒りを「そんな事」と表現している。そして父親の罵声から具体的に読み取っているのが、「私」の存在、(役立たず)というあり方に対する否定である。父親が認識する(正しい)(あり方)とは(役に立つ)ことだと考えられる一方で、「私」の認識する(あり方)は(書く)という仕事に主眼が置かれていると考えられる。「私」が常に(書く)ことのできる状態の保持に執着し続けているのは、それが自分の固有の(あり方)の実現に繋がっているからである。

「私」が父親と大喧嘩したのは、その(あり方)に対する考え方が相違しているためであるが、家出して以来、「私」が自分の(あり方)の実現——(書く)こと——に努めているのは、父親の(役立たず)という罵声が(作用)し、自分が(役に立つ)ことを具体的に示す手段として仕事を行っていると考えられるのである。このように「私」が自身の(あり方)へ拘泥することこそが父親の(言葉)の具体的な実現だと考えられるのである。言わば冒頭の父親の罵声に潜んでいる(言葉)の意味——(役に立つ)こと——に、影響されているのである。結果として父親の(言葉)は「私」にとってこのようなポジティブな力を持つているため、逆に大喧嘩の後家出している間に父親に関して一切想起しなかったと言える。

二、空想の実行と、その挫折

従来、「児」を「盗む」という空想は、繰返し描かれる悪夢、神経衰弱の要素と共に、異常なモチーフの一つとして指摘されてきた。確かに「児」を「盗む」ことは常識では考え難いことであり、そのような指摘は的外れではなからう。しかし、第一章で検討してきたように、「私」は(美)への接触によって(精神)を(高揚)させ、結果、そのことが自分の(あり方)を実現することへと繋がる。それは父親の(言葉)の影響も考えられるため、決して単なる異常だとは言えない。しかし、それにしても、何故「私」は女ではなく、女の「児」を「盗む」空想をしなければならないのか。まず、按摩と女の「児」とのやりとりの描写を考察する。

「とと(父)とと」と戸外で甘つたれるやうな女の児の声がした。(略)／何か小声でグズグズいつてゐたが、私には解らなかつた。／「おかか(母)はどうした。ええ?」／子供は未だ何だかグズグズ小言見たやうな事を云つてゐる。(略)鼻声で何か小言を云ひながら寄つて来ると、私の腕をもんでゐる按摩の背に倚りかかつて、がじがんだ小さい手を按摩の襟首の中に静かに差し込んだ。(略)又何がグズグズいひ出した。

一見、ごく普通の親子の対話と動作の描写であるが、傍線

部に繰返し描かれた女の「児」の動作からは、「私」がこの按摩と女の「児」とのやりとりを詳細に観察していたことが分かる。波線部の身体の触れ合いから分かるこの親子の親密な（親子関係）は、冒頭における「私」と父親との喧嘩の場面に見られる激烈な（親子関係）と対照的である。按摩の（親子関係）には、「私」に欠如している肉親愛が見られるのである。また、芝居小屋で見かけた美しい女の「児」に対して、「自分が若し妻を貰つてもああいふ児が生れるとは考へられなかつた」と自分の胸中の憧れの女の「児」像を紡ぎ出し、「その児の父母が彼女の為にしてやるよりは完全に立見せ」ると思つたりするくだりからは、（父親）としての立場に立っている「私」像を窺い知ることができる。

以上のように、「私」は「児」を「盗む」空想によつて、自身の（親子関係）に、自身が欠如した肉親の情を、父親の役割を模倣することで獲得しているように見える。しかし「私」は「児」に対して（父親）の役割だけを演じようとしているのではない。女の「児」を通じて「私」に欠如した（親子関係）が補完されるという意味の他に、芝居小屋で見かけた女の「児」に向けられる恋愛感情も無視できないのである。「私」の感情は「恋する初めのやうな気分」といったものから次第に「純粹に愛情から来る欲望」といった明瞭な恋愛感情へと変化している。つまり、女の「児」を通じて肉親の情を満たしているのか、それとも恋愛感情を獲得しているのかは、一概に決めつけることはできない。この点について、

先行論では、単なる恋愛感情、即ち女の「児」に対し、その「エロス」の部分だけ着目している論考^⑩が見られるが、これまで述べてきたように（父親）の立場に立っている感情が「私」に見られることが明確である限り、この点も合わせて考えておかねばなるまい。

女の「児」に対する「私」の感情は複雑だと言えるが、ここでそこに一つの共通項が見て取れることに注意しよう。

私は人間として持ち得る責任なら必ず其将来に對しても持ち得る。教育でも生活でも、夫を持つやうな場合でも、少なくともその児の父母が彼女の為にしてやるよりは完全にして見せるがな、と思ふ。

これは一人の（父親）としての立場からの考えである。重要なのは「教育」という言葉である。それは冒頭の父親の罵声、つまり「ヤクザな奴」、「私が自家にゐる為に小さい同胞の教育にも差し支える」から分かるように、「私」の存在は全く（役立たず）だという内容を想起させる言葉である。その罵声に対し、「私」は（役立たず）の人間としてではなく、女の「児」に責任を持つと決心したことによつて、人に対し責任が取れる、（役に立つ）人間になろうとしているのである。また、「教育」というキーワードが父親の言葉と合致しており、女の「児」に「教育」を受けさせるという「私」の発想が、父親の考え方の枠組みと似通っていることが分かる。

このように「私」は（父親）の立場に立っている際、自分の父親と同じような発想をしている。ここから「私」は父親に反抗するのではなく、むしろ父親が望んでいる（あり方）を實踐していると読み取れる。そこには自分の認識する（あり方）の理想化が、父親が提示したあるべき（あり方）と一致しているのが見て取れるのである。

そして、女の「児」に対する恋愛感情の部分にもこれと同様な責任感が見られる。

他人の恩を盗むと云ふ事は悪い事が、知れないが、絶対にさう云へるものではない。若い女を愛して、其女が自分をそれ程愛さなくて、其上その女の両親が結婚を拒む場合でも自分が本当に其女を愛してゐるなら無理に結婚する、かういふ場合がある。そしてその結果が許さるべきものである場合が幾らもある。それと今女の児の場合とどれ程の差があるだらう、と思つた。

「私」は「若い女」と女の「児」とを同列として扱っているが、女の「児」の場合は、（現代）の言葉では、幼女誘拐であり、「若い女」と結婚することとは別次元の話のはずである。「私」が恣意的に構築した「私」だけの（論理）と（現実）との間には軋みや齟齬があることが分かる。が、ここで注目したいのは、「その児の父母が彼女の為にしてやるよりは完全にして見せる」という（父親）としての立場からの責任感の現れとして成立している点である。つまり、「若い女」

の意志を考慮せずに「無理にも結婚」できると語っているのも、責任を背負うことができるからこそ、「許さるべきもの」と捉えられているためである。それは今、女の「児」を「盗む」場合と大した差がないという「私」の（論理）を示している。

以上検討したように、女の「児」に対する、「私」の役割は、恋人として、父親としての立場を問わず、女の「児」を通じて、責任を与えられ、（役に立つ）人間になるということに重点が置かれている。換言すれば、「私」にとつては女の「児」という対象によつてもたらされる、人に対する自分の責任が重要なのである。このように「児」を「盗む」という空想について検討することによって、「私」と父親の（言葉）との深い関わりを読み取ることができる。

続いて、「児」を「盗む」決心は不動のはずであつたのに、女の「児」を「盗」んでからの、女の「児」に対する「私」の「感情」と「態度」が定まっていらない事実を明らかにしたい。

当初、按摩の女の「児」に対しても、「色の黒い可愛い児」、「野趣を持つた愛らしさ」と思つていたが、「盗」んだ後「おんぶしてや」と、田舎の子供らしいいやな臭ひが「して、すぐこの「児」に「厭きて荷厄介」と感じている。「私」は最初思つた女の「児」の像と現実の女の「児」との違いに気付いている。これは第一章で述べた（精神）の特質、つまり

特定の理由がなかったり、些細なことで（高揚）している状態の（精神）がじきに（下降）し変化していくことと深く関わっていると考えられる。このことは次の箇所でも確認できる。然し此土地の銭湯へは連れて行けないと考へた。私は兎に角此市を離れなければならぬと思つた。そして行くなら何と云つても、あの広い東京が一番安全だと思つた。

⇔

私も疲れて居た。（略）私は同じ床に臭い髪をした小さい女の児が低いいびきを立てて眠つてゐる様子を見、又其辺の部屋の様子などを見てゐると自分の生活に不思議な物が入つて来た事を今更に感じた。そしてそれが他の物と如何にも調和がとれてゐないやうな心持がした。

女の「児」を連れて一緒に東京に行こうと考えていたが、その直後に「臭い髪」、「低いいびきを立てる」様子を見ると、女の「児」を「不思議な物」と称し、自分が改装した部屋の「他の物」と「調和がとれてゐない」と語る。二重線部の「他の物」とは、引越してきた当初に用意した「必要な世帯道具」の他、「美しい更紗の布」、「造花の材料にする繻子と打ち抜いた木の葉」といった部屋を美しくするための小道具と、女の「児」を「盗む」ために準備した「セルロイドで出来た西洋人形」と、「チヨコレート」である。女の「児」はやはり「瀬戸内海に沿うた或小さい市」の田舎者であり、彼女はその玩具の遊び方を「知りやんしえん」と答えた。その田舎

者的なありようは「瓦斯ストーヴ」に火をつけられた「ヴオツ」という烈しい音に女の「児」が驚いたり^①、「味つけ海苔と福神漬け」を食べたりしている箇所からも窺える。また、「コンデンスミルク」は「舐め」たが、「ソオセーヂの缶詰」を「頭を振つて食はなかつた」箇所からは、西洋的なものを珍しく思いながら、抵抗を感じる箇所も見られる。このように女の「児」の田舎者的なありようが作中に描かれる小道具によつて浮き彫りになっている。「私」が女の「児」の田舎者的なありようと、東京から来た自分とを対照的に感じたのが、「調和のとれてゐない」と思つた所以である。その後、ようやく「私の女の児に対する感情や態度が動きさうな不安」に氣づいたのである。

暫く立つと「もう此の児を可愛くは思はなかつた」、「此女の児をそれ程愛しては居なかつた」、「自分が本当に盗みたと思つたのは此児ではなかつた」というくだりが、反復されている。

以上のように、女の「児」を「盗」んだ後の「私」の女の「児」に対する「感情」と「態度」については、固まつたはずの感情が容易に変化していることが分かる。「私」は女の「児」とのやりとりを通じて（役に立つ）ことの実践が不可能であることを（発見）して行くのである。

そして最後に、「前の晩此児を連れて来た時に書いた紙を出して細かく裂いて了つた」という展開へと至る。従来の先

行研究において、「私」の紙を「細かく」裂く行為は全く重要視されてこなかったが、この行為は「私」の反復している〈精神〉の一種の定着点だと考えられ、重要な手掛かりだと言える。「私」は〈役に立つ〉ということを全うしようとしたが、実現できず喪失感に直面する。このように考えれば自分の〈あり方〉の実践の〈書く〉ことの産物Ⅱ紙を「細かく」裂く行為は、自分が実現できない事実を〈発見〉したことを意味していると考えられるのである。

以上のように、「私」の中に父親の〈言葉〉が底流しており、「私」が責任を取れる人間になろうという努力が父親が提示した〈あり方〉と深い関係があること、しかし「私」の有する〈精神〉の特質の故に、結局「気まぐれ」によって何もも果せない〈自己〉を〈発見〉したことが分かる。つまり、瀬戸内海での一人暮らしは、〈自己〉を〈発見〉した旅だと考えられるのである。

三、 結末の解釈

この作品は、「私」が女の「児」の母親に罵られた後「警察へ曳かれた」という一文で結ばれており、「私」の感慨が語られることなく、本作は終わる。ところで回想される「児」を「盗む」経緯には、この結末と似通った三つの〈叱り〉の構図が見られる。例えば、冒頭の父親が「私」を叱る場面、

そして「私」が「児」を「盗」んだ後「大きな声を挙げて泣いた」女の「児」を「鋭い調子で叱りつけ」た場面、結末に見られる女の「児」の母親が「私」を「激しく罵」った場面である。三つの構図はそれぞれ状況が相違するため、同列に扱うことは難しいものの、そもそも本作は〈叱られる〉ことから始まり、〈叱られる〉ことで幕を閉じる、という構成であるため、三つの〈叱り〉は決して偶然的照応と見るべきではない。後年回想される際、三つの〈叱り〉の構図によって表出されるものは何であろうか。冒頭における父親の〈叱り〉の構図を既に検討してきたので、ここからは残りの二つの〈叱り〉の構図を検討する。

女の児は又「去ぬ、去ぬ」といつて泣出した。(略)
私は初めて本当に恐ろしい顔をして、声は高くなかつたが鋭い調子で叱りつけた。女の児はキョトンとして息を引いた。(略)／私は直ぐ穏かな顔をして女の児を慰めてやつた。然し女の児はもう私の心を見ぬいて、少しも親しまうとはしなかつた。憎らしい程意故地な心持を見せてゐた。私も子供だと思ひ直しても矢張り意故地な気持になる自分をどうする事も出来なかつた。

「私」が女の「児」を「鋭い調子で叱りつけた」構図と、冒頭の「私」が父親に叱られる構図とは、似通っていることが分かる。父親は「私」を「真正面から平手で顔をピシヤリ／＼撲るような調子で」叱り、「私」も「乱暴な事」を言い

返し、その後家出をする。無論、女の「児」の「私」に対する反抗は「憎らしい程意故地な心持」を見せているだけであつて、「私」の父親に対する激烈な行動とはレベルの差が感じられる。しかし「子」の位置に当る女の「児」と「私」それぞれが「父親」の位置に当る「私」と父親に対し、妥協を示さない点は類似している。

波線部のように、「私」は女の「児」の「意故地な心持」に対して、自分も同様に「意故地な心持」になつてゐる。女の「児」を叱ることによつて、自分は「父親」のような役割をしてゐるうちに自分も子供であると改めて認識したことを示している。「子」である女の「児」と同様、元々「子」である「私」の立場を意識し始め、目の前にいる相手にしてくれない女の「児」に、父親と喧嘩した「父」と「子」という対立構図を重ね合わせてゐる蓋然性が高いと言えよう。つまり、「私」は、女の「児」との擬似的な「親子関係」の中で、女の「児」を自分に重ね合わせることで、「子」である「私」の立場を再確認できたのであろう。そのために涙が出たのである。

私は涙が出て来て物が見えなくなつた。(略)自分も此児も哀れな者のやうな気がして来た。私は泣き出した。女の児も急に声を挙げて泣き出した。私はもう何もいへなかつた。

「自分も此児も哀れな者」とある。「私」と女の「児」は

同様に「子」でありながら、居場所を持たぬ家なしの「哀れ」な人間なのだと思ひ、「私」は再び「泣き出し」てゐる。この「涙」と、冒頭に触れられた「涙」は、明確に呼応してゐると言えよう。父親との喧嘩の後「久しぶりで泣い」た後、「私」は決心し家出していることから、「涙」は父親との間の懸隔の象徴であり、家出に至る重要な一過程だと思われる。後半に至ると、「子」の位置にいる自分の再発見を契機として、「私」は「子」であると同時に女の「児」にとつての「父親」となる。この「涙」は父親との懸隔の象徴ではなく、逆に「私」を「父親」になぞらえることによつて、自分の父親の心情が理解できたことを示していると考えられる。したがつて父親と「私」、「私」と女の「児」の似通つてゐる関係の構図は「涙」によつて表されてゐる。続いて「私」は以下のような感情を持つてゐる。

私は前の晩とは全く異つた感情で、女の児を胸へ抱いて寝た。前の晩は不安ながら何かしら浮々した心持があつたが、もうそんな心持は全くなかつた。

「私」の心持は、前の晩と異なつてゐるが、それは、女の「児」との緊密な一体感による深い安堵の念から生じたものと推測できる。女の「児」とは家なし「子」、同病相憐む同士としての連帯感が生じ、女の「児」と共に在り、共に生きる関係となつたため、心持が落ち着いてゐるのではないかと考えられる。しかし、それはあくまでも「私」の認識であり、

女の「児」の認識との間にズレが生じてしまう。女の「児」は「私」に「恐ろしい顔」で「叱りつけ」られて以来、既に「私」に親しみのしぐささえ示していないのである。

「私」は「何にも口を利かな」くなつた女の「児」との關係を修復するために、「菓子をやらうか？」と尋ねるが、彼女は「返事をしなかつた」。「私」は一層努力し「チョコレートを持つて来て手に握らし」たが、女の「児」は「口へは持つて行かなかつた」。女の「児」が「かたくなに黙つて了つた」、「黙つて見向きもしなかつた」、「私の顔を見ずに」というくぐりから、「私」に叱られてから女の「児」が「私」への親近感を抱いていないことが分かる。お菓子を渡す場面から、「私」はようやく女の「児」の心持を改めて認識したのである。「私」は元々、女の「児」と共に在り、共に生きる」と強固に信じていたが、このような女の「児」の行為から、關係の修復が不可能だと認識し、その思いは実現できないと「発見」した。その後、夢がまた出現したのである。

この夢が語っているものは何であろうか。

従来、本作に現れた三つの夢のモチーフは、「私」の「精神」の不安定・異常の要素として注目されてきた。「自分の鼻に夢魘され」たり、「按摩に迫ひかけられ」たり、「女の児に逃げられ」たりしており、受身表現によつて被害という側面が強く表出しているのもその現れと言えよう。勿論、夢は不安定な「精神」の所産だと考えられるが、その他にも本作

における夢の出現には、文脈を追っていくと一つの共通点を見出すことができる。

結論を先に言つてしまえば、「私」が自分が思っているはずのことが実現できないと「自己発見」する際、夢が現れるというパターンである。一つ目の夢は、家出をしてから仕事が始り、「私」は自身の考える「あり方」が実現できると思われていながら、「半月程続」くと、「段々に疲れて来た」と、「精神」が「下降」していき、揺れ動く「精神」のため、本当は信じていたものが実現できそうもなくなつた直後に、現れている。二つ目の夢の出現も、「児」を「盗む」ということは、「役に立つ」ことの実践だと思われていたものの、女の「児」が「臭い髪」で「いびきを立て」る様子を見ると、自分の生活に不思議なものが入つてきたと意識し、女の「児」との間に「調和の取れてゐない一種あぶなつかしい感じがあるのが心配だ」と自分の揺れ動きのような氣持を「発見」した直後、夢が現れる。そして三つ目は、既述したように關係の修復が不可能だと「発見」した後には現れるのである。

以上のように、「私」の夢は「自己発見」の度に喚起されるのであり、潜在意識における「自己発見」に関わる痛切な不安が感じられたことによつて、現れたものだと考えられる。つまり、夢は実行できると信じていたことが本当はできないと「発見」する際に現れる、と捉えることができる。

結末の「私」は、女の「児」の母親に「烈しく私を罵」ら

れ、「黙つてゐた」のとは対照的に、冒頭の「私」は父親に罵られ「私も乱暴な事を云つた」とある。このような反応は冒頭と対応しつつ語られていると読める。この冒頭と結末との強い行為の相対性から、女の「児」の母親に「罵」られ「黙つてゐた」という「私」の反応に焦点を当てるべきだと考えられる。それは自分の行為を「許し難いイゴイスティックな行為」だとする反省がようやく定着した結果^①、「出刃庖刀を振り廻」さずに、大人しく「警察へ曳かれた」と言えるのである。この行為の変化の背後には自身の罪という「発見」が横たわり、ここに「私」の成長が見出せるのではなからうか。

これまで述べてきたように、本作に見られる〈叱り〉の構図を分析することによって、「私」が〈精神〉の特質を自覚し、〈自己発見〉に至る展開も、「私」の成長という解釈に繋げることができる。

おわりに

以上のように父親の罵声の〈言葉〉が果たす機能などを探ってきた。冒頭で「私」は父親に〈役立たず〉な人間として認識されている。結末の「警察に曳かれた」場面に至ると、正に山田広昭^②の指摘したように、父親の予言通り「社会から排斥される」犯罪者となっている。したがって一見、外

側の人間から「私」への否定的な視線が冒頭から結末まで一貫しているように見える。しかし、実際そのプロセスを見ると、家出をしている間に実行していること（「仕事」、「児」を「盗む」こと）には、父親の〈言葉〉の影響が見られ、女の「児」を通じて、父親の気持ちを理解し、成長していることが窺える。よって先行論が指摘してきたような、異常というモチーフの小説であるといった解釈ではなく、「私」の成長という点について、積極的に肯定的な解釈を与えることはできる。

志賀の作品に父子不和のモチーフを見出す傾向は依然として根強いというべきであろう^③。しかし、そうしたイメージとは裏腹に、「児を盗む話」では志賀が、父子の関係を〈言葉〉の伝達によって父親の期待する〈あり方〉の問題として提示し、〈子〉としての「私」が父親の期待に懸命に応えようとする行為とその限界を発見する過程^④（「自己発見」）が浮き彫りになってゆく構造が、一篇の中心にあるのである。

注

- (1) 「尾道生活の経験で、半分は事実、児を盗むところからは空想」（『改造』一九三八年六月）
- (2) 「志賀直哉「児を盗む話」考 その悲劇性をめぐって」（『日本文学風土学会記事』第二十巻、一九九五年三月）
- (3) 『志賀直哉の文学増訂新版』（一九七六年六月、桜楓社）

(4) もつとも一方で、近年この作品には、作者の実生活と直結させる読みとは異なる読みも試まれている。即ち、伊藤佐枝（志賀直哉初期作品における〈部屋〉という居場所——「児を盗む話」を中心に）『都大論究』第三十九号、二〇〇二年六月、上田穂積（志賀直哉における〈音〉と〈声〉——「児を盗む話」を読む——『国文学研究』第一三三卷、二〇〇一年三月）のように、〈部屋〉、或は〈音〉と〈声〉といったキーワードによる新たな視点も試みる動きも出始めているが、小説全体の構造を明らかにする上では、「児を盗む話」はいまだに考察の余地は大きいと言える。

(5) 父親に注目した先行論も勿論あるが、市川浩昭（前掲論）、菅野博「児を盗む話」と「范の犯罪」——初期志賀イズムの敗北——『芸術至上主義文芸』第二十五卷、一九九九年十一月などである。しかし、それらの論考は志賀と父親との不和、つまり志賀自身の実体験と結びつける立場から論じているため、改めて作中における父親の役割を論じる必要がある。

(6) また父親の罵声で似通ったものが「廿代一面」（『新小説』一九三三年一月）の「そんな事をしてゐて、それが貴様の何になるのだ。——全体貴様はこれから何をやっていくつもりだ」にも見られる。この父親の罵声は「児を盗む話」と同じように、具体的な内容が明かされていないが、作品全体を通してみると、父親は主人公「彼」の「同人雑誌の仕事」に対して不満を持っているのが窺える。

(7) 言葉の使い方は清水康次『暗夜行路』「第二」を読む——直面の時・発見の時——（『京都光華女子大学研究紀要』第三十九号、二〇〇一年十二月）に示唆をうけている。尚、「暗夜行路」と「児を盗む話」のモチーフについては、風景の描写という点について似通っていると従来指摘されてきたが、この点については今後の課題としたい。

(8) この〈書く〉行為と、今まで述べられてきた仕事が同一視できるか否かはいまだ問題が残されているようである。が、仕事の実内容（暫く休んでゐた長い仕事にとりかかった）の「仕事」が具体的に何を指すのか明らかにされていない）について具体的に明示されない限り、「児」を「盗」んでからの〈書く〉行為自体（内容問わず）は「私」の仕事だと認められる。

(9) 家出の間、父親のことは「私」にとつて議論する価値がないと認識しているため、冒頭以外では触れられなかったという可能性も考えられるかもしれない。しかし、今までこのような長い間家出した経験の全くない「私」にとつて、その家出のきっかけ、言わば父親の存在を意識していない、或いは議論する価値がないとはいいたい。

(10) 富澤成実『児を盗む話』のエロスと孤独——初期志賀直哉の性と文学（三）——『立命館文学』一九九一年三月

(11) 勿論今まで女の「児」に責任を背負おうとするのは、「六つばかりの美しい」女の「児」を前提にしている。ところが、最初按摩の女の「児」に対しても、好感を持っていた。

(12) この点について伊藤佐枝（前掲論）は女の「児」にとつて東京の上流階級出身の彼の（部屋）に対する驚きだと指摘している。

(13) その後、女の「児」も「泣き出し」たが、その前にも述べたように人に「知らせようとでもするやうな大きな声を挙げて泣いた」ことから、女の「児」が泣いたのは家に帰りがつてゐるためとも、「私」に禁止され叱られたからとも推測できる。つまり二人の涙は同質のものではなく、それぞれの悲しみは決して共有されてはいなかったと言える。

(14) 今まで「弱々しい常識的な反省」、「弱々しい反省」と繰り返されていたが、「自分全体を引き渡す事は出来なかつた」り、「腕力づくな心持」で、その「反省をおさへつた」りとあつたように、定着していないことが窺える。

(15) 「固着と転位 志賀直哉というテキスト」（『危機の言説』二〇〇〇年三月、東京大学出版会）

(16) 父子不和というモチーフについては「和解」（『黒潮』一九一七年十月）が想起できよう。「和解」においても父親との不和の原因は「不和の出来事は余りに多かつた（三）」と、明確に語られていない。「児を盗む話」では、父子の問題が作品全体で一貫していないように見えるが、根底では父親の〈言葉〉が〈子〉である「私」の中に流れていることが、直接的に父子の関係を取り上げている「和解」と異なっている。

【付記】本文の引用は岩波書店刊『志賀直哉全集第二巻』（一九九九年一月）に拠つた。

（こうじょへい／本学大学院博士後期課程）